

国語科より

【3学期現代文特別講座（新高3）】

1. ご受講に当たって

① 予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

□筆記具：鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、ペン、マーカーなど、お好みのもの

□辞書：国語辞典(電子辞書やスマートフォンのアプリ・サイトの利用も可)

授業中に使用することもあります。復習・予習の補助としても使用します。漢和辞典も使用できればなお良いでしょう。

□ファイル：クリアファイルなど(配布されるプリント、テストをまとめるため)

② **Gnoble** の授業内で配付されるもの

□通常授業テキスト:1月1回目の授業内で配付

□知識問題解答

2. 授業の進み方と日々の取り組み

① 学習効果をあげるために

▼3特別講座現代文の授業の流れ

導入教材⇒ 宿題の解説⇒ 授業内演習の実施⇒ 授業内演習の解説⇒ 漢字教材

▼特別講座現代文の授業で意識して欲しいこと

現代文は、単に量を解けば良いというものではありません。一題一題、いかに濃密な学びを得るかが重要です。グノーブルの授業では1回の授業で2題を読みますが、その2題からできるだけ多くのことを得て、次回以降の演習に生かすつもりで臨んでもらいたいと思います。

同じ文章が出題されることはほぼありませんが、以下の2点は普遍的に通用します。

①解法

②教養

①に関して。我々は大学受験に向けた指導を行うのですから、もちろん、目の前の問題を解くための具体的な過程をお伝えします。いわゆる「フィーリング」で終わらず、確実に正解するための読み方・考え方を説明しますので、テキストや解答用紙の余白などにどんどんメモを取り、正解に至るプロセスを後から自分で再現できるよう、努めてください。なお、解説を聞く際、自分で書いた答えを全く捨ててしまって、単に模範解答を書き写すことに終始する人がいますが、時間の許す限り、模範解答と自分の相違を比較検討するようにしましょう(追い付かなければ、復習の際にでも)。授業は、講師の美しい解法を堪能する場ではありません。自分自身が解けるようになるためのヒントを吸収する機会です。

②に関して。著者の視点や論理を自分自身のものとして使いこなせる水準を目標とし、扱う文章を血肉にしてもらいたいと考えています。そのための媒介者として、授業担当者が存在しています。解説を手掛かりに、実感のある理解を目指しましょう。自分で具体例を出したり、授業後に要約を試みたりすることが理解度のチェックになります。

② 日々の取り組み

▼宿題と復習

▽現代文の宿題

30～90 分程度で取り組めるようなテキストの問題を毎回一題出題しています。ほぼ記述式ですので、自分の納得いく答案が書けるまで推敲しましょう。なお、問題を解いていないのに解説授業だけを聞いても、ほぼ意味がありません。必ず、実施しましょう。

▽現代文の復習

現代文の復習は、以下の 3 つの観点から行ってください。

①語彙

「意味があいまいだ」「書き取りを聞かされたら答えられないだろう」と思われる単語を、本文から選び出します。読み仮名や意味を調べ、テキストの余白や語彙ノートにまとめておきましょう。その際、「認知語彙」と「使用語彙」という 2 種類の語彙を意識すると良いと思います。認知語彙は文章の中で出てきたとき、わざわざ辞書を引かない、つまり、何となく意味が分かるような水準の単語のことです。使用語彙は、自分自身が文章や会話の中で使いこなせるものです。使用語彙は認知語彙の数分の 1 だと言われています。知らなかった言葉(認知語彙でないもの)だけでなく、ちょっと自信のない言葉(認知語彙には含まれるが、使用語彙ではないもの)も調べるようにすると、実戦力が高まります。

なお、センター試験(評論)の演習を行った際には、問 1 の漢字問題の選択肢は全て漢字を書いてみましょう。

②解法

特に自分自身が間違った問題を中心に、正解を導き出すプロセスを言語化しておきましょう。記述問題においては、「模範解答の根拠となっている本文記述はどこか」「模範解答で表現が工夫されているのはどこか」「自分の解答をどう直せば満点に近づくか」などを考察します。また、選択肢の問題では、ダミーの選択肢の誤りを指摘します。

日本語が母語である場合、現代文の演習の際には、方法論やテクニックを意識せずに取り組んでいる生徒が多いものです。しかし、その日常的・無意識的な読解だけでは、行き詰まってしまうことがままあります。そのときに、日ごろ言語化したノウハウが助けになります。

③要約

見開きの文章(B5 で 2 頁)を 100 字前後にまとめるつもりで、要約に挑戦すると良いでしょう。文章全体の構造を考えたり、実感を持って理解したりする、良い勉強の機会となります。不明点が出てきたり、要約答案を見て欲しかったりするときは、授業担当にご相談ください。また、もとの文章を短くまとめようとする努力の中で、熟語語彙を増強することにも役立ちます。

▽読書

語彙力・読解力、思考力、教養の下支えとして、特に高 1・高 2 の間にこそ、読書をして欲しいと思います。学校や塾の現代文で面白かった文章は、もとの本や同じ書き手の本に当たって欲しいと思います。また、日本人としての教養としても、熟語語彙の増強のためにも、夏目漱石などの近代文学に触れて欲しいという思いも強いです。ただ、それ以上に、この時期には、大学で学びたいと思っている分野と関わりのある読書を推奨します。まずは、中高生向けに易しく書かれた岩波ジュニア新書(ただし、書き手は一流です)の中で、興味のある分野の本を探してみたいかがでしょうか。社会科学系であれば、有斐閣アルマなど、大学の入門授業で使われるような本に挑戦してみても良いでしょう。自然科学分野に進む人は、Newton 別冊や講談社ブルーバックスなどを読むことで、高校の科目の枠組みを超えた視野を得られるのではないのでしょうか。

(参考資料) 受験科目「国語」の特質と長期的展望の必要性

大学受験の一科目として「国語」を見たとき、注意しなくてはならない点は、大学により求められる力が大いに異なるということです。そもそも、国語が受験科目に存在するかどうかということ自体、大学によって差があります。

たとえば、国立理系志望の生徒の場合ですと、

- 東大……………理系でも二次試験まで必要
- 東工大……………二次試験、国語無し。共通テストでは受験するが、最終合否判定における共通テストの重要性が著しく低い
- 国立医学部…二次試験に国語があるところは東大・京大など限られるが、共通テストで高得点が必要である

というように、志望校によって国語の必要状況に差があることが分かります。

同じように、現代文・古文・漢文という3つの区分に関しても、選択問題・記述問題という形式に関しても、どこまでの学習が必要であるかは大学によって異なっています。私立文系の大学では、学部・学科ごとに¹出題範囲・形式が違うこともしばしばです。受験技術的な話ばかりするのは我々も好きではありませんが、国語の受験勉強に関しては、志望校が固まり次第、受験科目として国語がどのよう²に必要であるかを調べるのが相当に重要です。配点等を調べると同時に、実際に解かなくて構わないので、早いうちに過去問を見てみることを推奨します。

こうした入試制度に鑑みた上で、グノーブル国語科では、高校生活3年間の国語学習に関して、以下のような学習スケジュールを提案しています。

(中3…古文入門 [冬期講習]・現代文入門 [3学期])

高1…古文 [春期講習からの通年講座、1年間完結]

高2…現代文 [春～12月] (文系、東大・京大志望の理系)

古文 (高1で未履修の者) [春期からの通年講座、1年間 (もしくは春～12月) 完結]

※高1・高2の夏期講習と冬期講習に「漢文」開講 (どこかで1回受講する)、それを踏まえた長文演習講座として新高3 (高2) の1～2月に「文特別講座」開講

※新高3 (高2) の1～2月に「古文特別講座」(高1・2で未履修の者向け速習講座) 開講

高3…志望校別の対策 [春期講習から直前講習で完結]

東大国語、難関国語、私大国語、小論文・医学部小論文

※難関国語は京大・一橋大・阪大・東北大・筑波大・お茶の水女子大など、2次試験に記述の国語を課される大学を受験する生徒向けの講座

※私大国語は早稲田大・上智大・明治大・立教大などの文系学部を受験する生徒向けの講座

※4月の入室テストで不合格の生徒は4～7月開講の基礎力強化講座「受験国語基礎」にご案内

※夏期講習と冬期講習に「共通テスト国語」開講

学校で、理科・社会の範囲履修があまり進んでいない高1のうちに、通年で「古文」を受講し、古文の学力を完成させるスケジュールが理想的だと考えています。そうすれば、高2の間に、現代文の実戦演習や理科や社会の勉強に着手する余裕ができ、現役合格の可能性が高まります。

いずれにせよ、高3になって慌てて古文の学習に手を着けるようでは、十分な学習時間を確保しにくく、成績を上げるのもなかなか難しい、という事実はお伝えしなくてはなりません。どのような方法で勉強するにせよ、入試に国語が関わる(関わりそうな)場合は、高2までに古文(漢文を使用する場合は、漢文も)の基礎学力を身に付けることを前提にお考えいただければと存じます。